



閏四月十七日

內外新聞

第七日
每出版

知新館

第一

丸山氏藏書

西垣文庫
文庫 10
7348
1



特 文庫10
7348
1



神戸新聞 西四月廿八日 西五月廿八日 日出

○ 第五月十八日 此六月夜中ノ大雨ニヨリテ

當地ニ出来セシ堀切ノ不行届ヲ證ス可シ

近頃美麗ニ造營シタル米國コンシユル名後

館ノ前面ニアル砂濱ハ斯ノ大雨ノ水害ヲ

醸セリ 曩ニ工入掘切コ營シ時勞煩ヲテキ

シトル名社中ノ居館ハ尤モ此水害ヲ受タ

リ軒下并ニ商店ヘノ通行亦暴流ノ為ニ大

ニ害セラレタリ是日本人ノ建築ノ術ニ疎



キカ故也

○大坂ヨリノ報告ニ云

大日本 皇帝ハ未タ大坂ニ滞在ナリ供奉ノ
面々モ多人數輻湊シテ大体市中ニ充滿ス
ルカ故ニ如何ナル小家ト雖借料等非常ニ
貴騰セリ茲ニ於テ考フレハ大坂ニ開港セ
ント欲スル人ハ斯ノ如キ借賃ホノ高價ヨ
シテ畢竟盛ニ行レシ商法モ漸々衰微ニ
傾クノ不幸ニ遇セル

○第五月十七日

我四月朝サラミス

名ト云フ

蒸氣船ハ船ニ英國公使ハルリーバークス

名ノ旗章ヲ揚ケテ入港セリ時ニラセーン

名船ヨリ定例ノ祝砲ヲ發セリ斯テ暫時ノ後

サラミス船ハ大坂ニ出帆シ再ヒ翌日夕ニ

至テ歸着セリ

○同日夕ロト子一船副將ケツヘル名ノ旗章

ヲ揚テ入港セリ時ニ米國戰艦コルハツト

オナイイタ名船ヨリ祝砲ヲ發セリ

○翌十八日我四月廿六日朝ゼブラ船ハ英國公使ハ

ルリーパークス名ノ護衛トシテ兵士卒數

名ト海軍士卒ヲ乗セテ大坂へ發セリ

○同日ロツト子一オセーノ二艦モ亦大坂

へ赴ケリ時ニ天保山ノ砲臺ダイバ并ニ米利堅艦

コルヘツトヨリ祝砲ヲ發セリ

○同日夕ヘルマン名船二百五十人ノ婦人小兒

ヲ乗セテ江戸ヨリ來着シ報告ヲ陸ニ通ル

ヤ直チニ豊後洋ニ向テ發セリ此報告ニ依

テ左ノ新聞ヲ得タリ

○會津并其外等凡テ廿万五千ノ兵ヲ率テ江

戸へ向テ發セリ一橋徳川氏也ノ海軍モ亦海軍

奉行某等七隻ノ軍艦ニ將トシテ會津兵ノ

應援ヲセンカ為メ昼夜蒸氣ヲ燃シテ江戸

海ニ在リ當時江戸城ハ已ニ

皇帝ノ所領ニ屬セリ且ツ碇泊スル船ハ江戸

在ル女人童子ヲ他所へ運漕スルノ用意ヲ

ナセリ

論者曰是金夕空レキ風説ニレテ信スルニ足ラス
暫ク千五百人ノ兵アリト聞クニ今二十万五千
人ノ兵有リトハ虚説ノ甚レキ者歟

○十八日朝我四月廿六日横濱へ發セント用意セシ
バルクオレークス名船ハ延期レ翌日我廿七日出
帆セシ時未タ港口ヲ出サルニ不幸ニシテ
洲ニ乘セタリ時ニ在港ノオセーン船ヨリ
速ニ挽舟ヲ出シタレ凡東風殊ニ甚シクシ

テ挽ク丁能ハス又ストーニチ船ヨリモ挽
舟出シタレ凡亦能ハス後漸クアリ満汐ノ
時ニ當リテコツクチマヘルト云小軍艦ヲ
以テ挽出タセリオレークス船ハ聊モ損害
ナクシテ横濱へ出帆セリ

○香港名地ニ在ル英國コンシユル名役メトホル
スト名人ハ上海ノコンシユル医宦ウインチ
エストル名人ノ後役ニ任セラレ又メトホル
ストノ後役ハジョンマルクハム名人へ命セ

ラレシヲ聞ケリ

○本月十六日

我四月廿四日

ノ後ハ物價相場ノ報告

ヲ得ス然レ子ガリ正木綿糸并ニサハイ服連ハ他
日價ノ上騰スルヲ待居ルトテ殊ニサワイ
ハ甚々下直ニシテ買込タル人困却ノ風聞
アリ

○津出し品物ノ中茶ハ殊ノ外好ミ手多シ然

シ仕来リシ出港物ハ多生糸煙草ナリトツ

或人ノ書狀

来意ノ趣ニ夏中

コフ子セリカケ

小艇競駈ノ企コレ有ト實

ニ開鬱ノ一トモ相ナリ或ハ適然タラン然
リト雖社中人少加之小艇モ亦些少ニ屬ス
或ハ不可ナランカ余以為ク時々砲發ノ會
ヲ催シテ此ニ換ヘハ如何ン費用モ甚少ク
シテ木の糊紙等モ又聊備ハレリ且ツ地形
ヲ撰ミ東方ノ海濱ヲ以テ之ニ充アノ可シ發
砲期日ノ如キ每十四日ニ一度ツ、ニテ可
ナラン又費用ヲ減省スルカ為ニ一箇ノ粗

的ヲ用ヒシ此拳ハ實ニ社中而已ナラス恐
クハ看ミル官ヒトモ亦愉快ヲ極ル一至ラン

近日入港出港船日記

入港ノ分

○第五月十七日サラミス横濱ヨリ着 同日

ロデ子一全所ヨリ十八日ヘルマン江戶ヨ
リ

出港ノ分

○第五月十七日ウエツト上海へ出帆 十八

日ヘルマン備後洋へ今日オライクス横濱
同日ウエルケン長崎へ

兵庫大坂ノ通船

○ストンチ船ナル蒸氣船日々朝八字ニ我五
神戸ヨリ大坂へ出帆シ午後五字ニ我七
大坂ヨリ亦神戸ニ發ス荷物旅人等運輸ス
可シ

以上

支那國

此歲、初メ二月頃ロヨリ唐國北京地名ト云
フ如ニ叛逆人アリシトツ其ニヘンヲ尋
ヌルニ尤キリシタン宗門ノ徒起ツテ
王命ヲ用イツ妄リニ逆意ヲ企ツルカ
故ニ天子ヨリ或ル大将ニ命シテ之レヲ
伐タシムトイハレ徒黨ノ内ニ外國人四
五人モ交リ助クルト云フ然ルニレイノト
云フ大将イデ、ヨリ克ク之レヲ平ラ

ゲレカドモ殘兵別レテ帝ハノ糧道ヲ絶チ
專ラ海賊ヲナスノ故北京地名之レカタメ
ニ大イニ擾騷スト云フ

集者曰ク舊幕府政權ヲ採ル之
時ニ當ツテ肥前ノ国島原ノ村落
或ルハ長崎ヨリニ里斗リ離レシ
処ロニ浦上ト名附クル村アリ凡
ニ三千家モ有リト云フ処ナトハキ
リシタン宗門ニ組セシモノ凡ツ合

セテ二千入モ有リレト聞ク夫レニヨツ
テ去年九月コロ尽ク召捕リニナリシ
カドモ如何ナル故カ之レヲ釋ルシ
今ニマダ盛ンナリト我カ宗門ニ皈依ス
ル者ハ皆之レヲ救フノ理ナル故佛人ヨ
リ助ケヲ乞イト云フ然ルニ当節ニ至
リ何ニカ御所置ノタノニ殊ニ御役人
方、御配慮トツ實ニ此ノ宗門斗リ
ハ恐ルコナリ

兵庫新聞

慶應四年歲壬四月三日
橋州兵庫
補公廟前高札之寫

大政更始之折柄表忠之成典彼為 行天
下之忠臣孝子之勅獎被 授身之公補賜
正之位中將正成精忠節義共功烈萬世輝
真二千歳一人臣子之龜鑑之故今般
神号城追諡之社壇造崇社 極度思念以依
之金子兩 御寄附社の 在事

但正行以下一族之者等鞠躬盡力其切方
不亦既此愛以 授命 紀可有之旨也
仰出幸事

右之通引 仰若能為天下有志之者所傳
所善計 在各自同志親之向之可也此の之

辰壬四月

長庫
裁判所

評者曰

上心以古ノ志信者子ヲ愛恤得之可也此の之

一子ノ能く多クも有る昔ノ人々之の如く近
里言ふくも 故著立傳ノ道哉 此の如く
相一御玉存き子ノ集者流之傳一云

○五穀大旱ナキ子ノ種ハス人間病之子ノ種ハ可ルカ
故今夜所一新之抄稿未々天下平定トモ云レオ
ル中ニモ只諸氏ヲ助ケニトモ第一ニ思ハレコトヨ
リ之ノ中後抄列神戶ニナレテ病院所ニ立
テ提^{アテ}遮ク爾氏ノ病ヲ平癒オセト各医ヲ集メ
王ノ定之能有るトモナリ去ニヨツテ如何ナレ

早賊者ニテ毛病来ト有レハ速ニ出テ之療治ヲ能スレ
ト云フ事ナリ

此病院所ニ立方ニ於テ六莫去シ清入用ナル天
下有急人ニハ所寄附以爲計ト云東公取具
船ニ入老文ケ虫セトノ所ニ由於以度七日月
二冊出糸ノ節ニ事ニ誌セ

關東新聞

以度夏東亦平定イタセレ故鎮撫惣督トシテ
近所ニ傳大御言撤清虫達ニ相来ト云

戰爭以後

四月十九日俄兵共町小宇都宮ニ據公シ是日俄兵
防クイアタワス其後已ニ為成セリコノ事ハ一日朝
友軍ハ各来リシ故ニ直ニ官軍少擧出ニ集リ
小山ト申驛ニヨイテ我ト催ス所成放小ニテ
宇都宮城ニ引退キ其後二日宇都宮義成友軍
大擧利アリシ者有俄兵城中ニ地雷火ヲ伏セテ
逃ル吾夜官軍ヨリ城ヲ攻込シ人城ニ起右地處
火落シテ是後官兵ト友軍ト夫ケルニ怪事ナリ

有之由是言也 於城兵と老山之屯ストイヘレコニ屯止軍
スレト可ワスレテ 終ニ會城ハ迹難ル
一信於路ハ進ミシ 城兵城後高田道ニテ松代へ進ム
トヨ上田相率ヨリ加勢トシテ 幸人宛拵出ス松代ヨリ
相率ハ道後ト途カニ難ル、トニテ 火急ニ人救ヲ
探知ス、ト多クハ六ケ敷キ苦ナルニ 今幸人ノ兵出サレシ
ト尤モ有ルハレト 礼謝シテ 尚加勢ニ及バズ者ヲ以テ
返ス次ニ上田ハ近國ノナカラ 僅カニ幸人ノ兵ヲ出ス
ト去リ、ハ只云伏ノ加勢ニシテ タノムニ足ラス 城ト共

ニ討スルベシト 令ヲ下スカ 高田勢驚怖 卒依テ
幸國ハ使者ヲ馳シ 望テ二百幸人ノ援兵ヲ加
ヘテ以テ 城ヲ救フニ 挫シキ 城途方ヲ久ヒ 敗走
スル 城ヲ度ヨリ 高田勢 追討シテ 殊ニ 勝利アリ
リシト ヲ 依之コレヲモ 留ナ 會城へ 迹カ 難ルナシ
許ニ 曰ク 高田勢 先ニ 一カ、ヘモセス 我カ 城下ヲ
甚ク 侵ニ 通シ 今 城ノ 迹ルニ 及ニテ 其意 遂討シ
幸 甚意 怪ク 士道ニ 相ラツトノ 風アリ
依之 信越 及ヒ 吳東 八平 穩ノ 由 風アリナリ 可及

く戦争ノ中一隊半ヲ擧下云ヘキ者ハ松代勢ト云下
ナリ上田勢一ノ云々杯ニテハ突ニ強國ト云レ

元新選組

近藤勇方事

大和

若ハ先月野所ニヨイテ召捕ラレシ如所ノ所治
ト来リ日ハニヨイテ方ノ如ク亦置置ルト

近藤勇方事

大和

日者又兇悪之罪有之如甲州信濃武州流山
ニテイテ友軍ニ敵對々条大逆有之今南条
トの之

至四月日

若く前級三條川原におあり候有之

西園寺三右衛門中將云二月信濃所總督ノ津保
去々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

大江山はる白雲をこらふ

あつて法語にのりて入る

園田忠平一右

甲州結城にて織の死骸を
見り

奥平孫右衛門

若くぬ故のすゝめ

良資

伏水にて織をすお掛ひし時

平河川に後をすむ後

とは思ひしおとすり

長肥

辰三月

於波府總裁有栖川宮様へ英國公使相觸
の事計及に付るを公使参殿途中に亦
く毎程秘に有る相忍由所觸達有る

辰三月廿五日後より建言

備りてありしと及南城市陣定り御廟集
り此の事なきと存存り得共給り更引に
相成りたる自死に既来もお詫に辱るに及
辰三月甲子日進軍に裁會存存りお祈

英國公使海來身涉違例之事相議以若然彼
之情實不相分招亦多存心受 亦得此作付
以美如句之存存心能言云

宮蘇之名多途

甲府近所進軍其乃在英國公使所應接
之美志參謀亦盡之其涉中言涉在彼此
作其後亦有存心之受彼分如之而法之美有之
以方其忍之招涉所處之類一應涉老六身
存心乃有平生之相遠軍中一人情所美
云其忍氣自就受其亦生心能計其地

帶客也下官亦有身以急速涉進軍上乃其後
叶版一日身忍氣忍性博言

辰三月

尾德大細言
筑前 宰相
池田信隆守
飛井源成守
稻田以高之信

知新録告文

以後我輩も社伴と結び日本^{ヤマト}舟國此
臨美い文ありすは強ききしるすの御心
原の事と免世の人く一志らせんれ免なり
まはるとあるはハも一免もそらうハの世を
一海の事一史冊籍の事一史板せしむ
けのちまうハいらの家とそとそと地と
うもよみ免せん事一と社伴一口の志
志しめん云々

